

# アカデミックサポートエリアにおける 学習相談の多次元比較

ラーニング・アシスタント 吉野寿紀

(生命医科学研究科 医工学・医情報学専攻 博士後期課程)

ラーニング・アシスタント 柚木慎太郎

(文化情報学研究科 文化情報学専攻 博士前期課程)

ラーニング・アシスタント 大谷諒

(文化情報学研究科 文化情報学専攻 博士前期課程)

学習支援・教育開発センター 准教授 澤宏司

## 1. はじめに

ひとことで大学における学習支援と言ってもその内容や形式は多様である。一般に多くの大学で、その内容は論文の書き方やプレゼンの方法など、いわゆる「アカデミック・スキルズ」が特に運営側において念頭とされてきた。国内においてラーニング・コモンズ（以下、LC）など学習支援を目的とする施設の普及が広がった2010年ごろ、同志社大学（以下、本学）の今出川校地にもLCが開設された。その時期においては本学のLCでも同様にアカデミック・スキルズの支援が中心であった（同志社大学学習支援・教育開発センター 2014）。ではあるが、2018年に本学2つ目のLCが理系学部を主とする京田辺校地に開設（木原・浜島 2019）された以降は、両校地を合わせた学習支援はアカデミック・スキルズに留まらず、より多様になった（澤 2020）。

2020年春ごろからの感染症対策下のLCの運営は、学習支援の特にその形式においてさらに多様になった。1つは学習の場としての機能の制限による多様化、もう1つはオンライン対応による多様化である。いずれも対面接触の機会を減らすのが目的であったが、前者はグループ学習を推進する機能をもつLCにおいてその存立の意義にかかわる根本的な問題であり、後者はその1つの対応策であった。グループ学習と学習相談はLCを活性化する循環構造にあり、どちらか一方が損なわれると施設全体の停滞を招きかねない（澤 2021）。

また、オンラインによるコミュニケーションは対面のそれよりスムーズにいかない

ことが多い。コミュニケーションツールへの習熟度や、ビデオ通話／音声通話／チャットなどメディアによる情報伝達の特徴を理由として、対面におけるコミュニケーションとの違いが生まれる。

これらのように2021年度の本学のLCにおける学習支援には、検討すべき様々な違いがあった。本稿ではこれらの違いに関していくつかの軸で比較を行い、今後の学習支援、学習相談の発展の一助となることを目指す。

## 2. 学習相談状況の比較

同志社大学両校地におけるLCの学習相談の履歴を集計し、以下の各項目について考察を行った。なお、本節で扱うデータ解析の一部は京田辺ラーニング・アシスタント(以下LA)の大谷が主導して作成されたことを明記しておく。

### 2.1 感染症対策による変化

まずは上述の大谷による解析ツールによって、理系キャンパスである京田辺校地における2019年度から2021年度までの学習相談シートを解析した。ここでは、この間における新型コロナウイルス蔓延による利用状況の変遷や特徴などについて、年単位の報告をする。感染拡大当初の月次変化については矢内(2020)および趙・矢内(2021)の報告を参照されたい。また、今出川校地における学習相談内容の詳細な検討については趙(2022)の報告を参照されたい。

京田辺校地の対面における相談件数を、分類コードごとに集計したものを表1に示す。特に2020年度は4月～7月上旬は対面での相談を中止していたこと、2021年度は2022年1月31日までの集計であり暫定的な値であること、P(ネット配信授業について)は2021年度に新たに追加された分類であることに注意されたい。

表1より、対面での相談の中止期間があった2020年度が最も件数が少なく、2021年度が最も件数が多い分類コードが多数ではあるが、感染症対策による影響が表れているコードとして、D・Kが挙げられる。特にKは2019年度が最多であるのは、留学生が海外からの入国制限を受けている状況であったため、対面での相談が困難であったことに起因するものと考えられる。またDは2020年度が最多であり、この要因として社会調査など対面での実施からオンラインへの移行を余儀なくされた研究デザインを模索していたタイミングであったことが考えられる。

表1 年度別の相談件数（上）と分類コード（下）

年度	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
'19	29	1	1	27	10	7	10	463	4	1	69	11	6	59	2	0
'20	7	2	0	62	6	11	5	217	2	1	2	4	13	15	1	0
'21	52	3	0	50	1	12	12	1021	5	1	2	28	27	37	2	10

A	レポートの書き方
B	文献の調べ方
C	文献の読み方
D	調査、研究の方法
E	プレゼンテーションの方法
F	論文の書き方
G	語学の勉強
H	特定の科目の学び方

I	自分にあった勉強法
J	留学について
K	日本語チェック
L	進学・就職など卒業後の進路
M	学業上の悩み・不安
N	その他
O	レジュメの作り方
P	ネット配信授業について

図1-3は、分類コードの集計について、学部ごとの比率をまとめたものである。ここでは特筆すべきコードとして、DとKに着目することとする。Dは2020年度において文化情報学部（文情）の比率が80%を超えており、他の年度では60%程度である。この要因として、文化情報学部ではアンケート調査や実験など多様な研究デザインの卒業研究が行われているため、感染対策の影響で従来のスタイルから変更したことにより、データの取得だけでなくその分析方法などの相談が増加したことが考えられる。また、Kは2020年度以降1ケタにとどまっているが、これは表1でも触れたように留学生が入国制限を受けていた状況であり、特にグローバル・コミュニケーション学部（GC）からの相談が減少していることがわかる。このように、表1で述べた感染症対策による影響の大きさは学部によって異なることが示唆される。

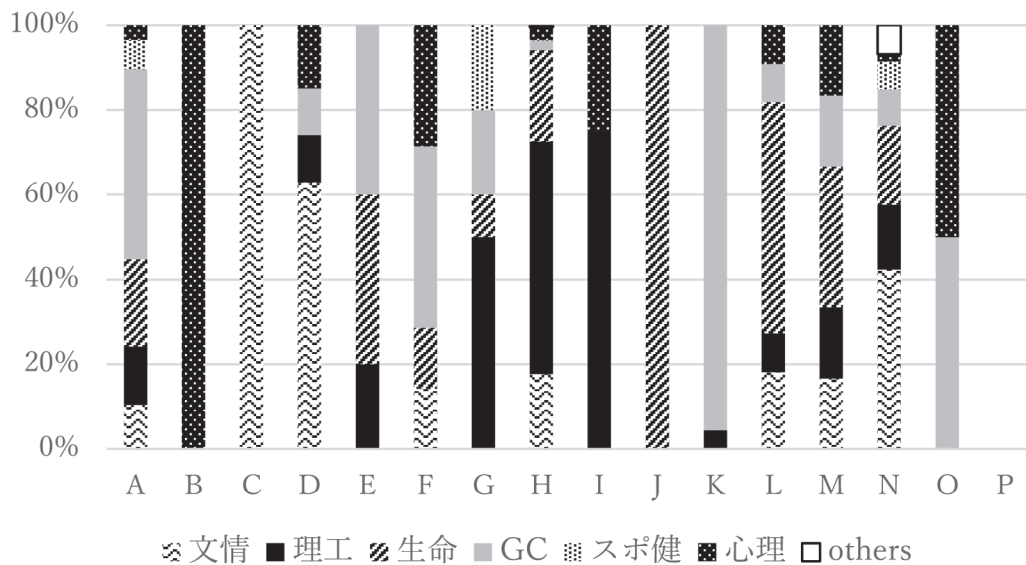


図1 分類コードの集計（比率・'19年度）

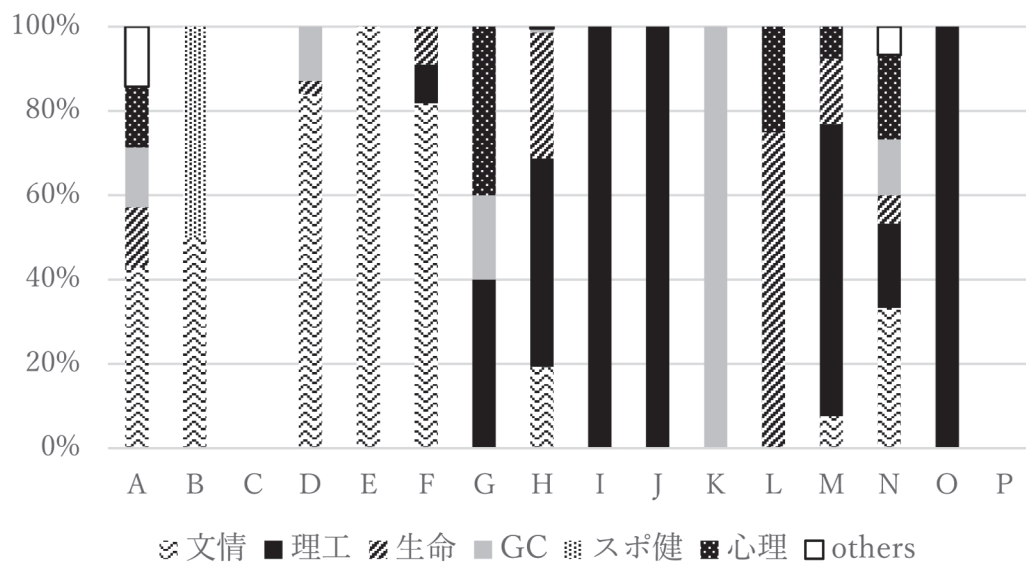


図2 分類コードの集計（比率・'20年度）

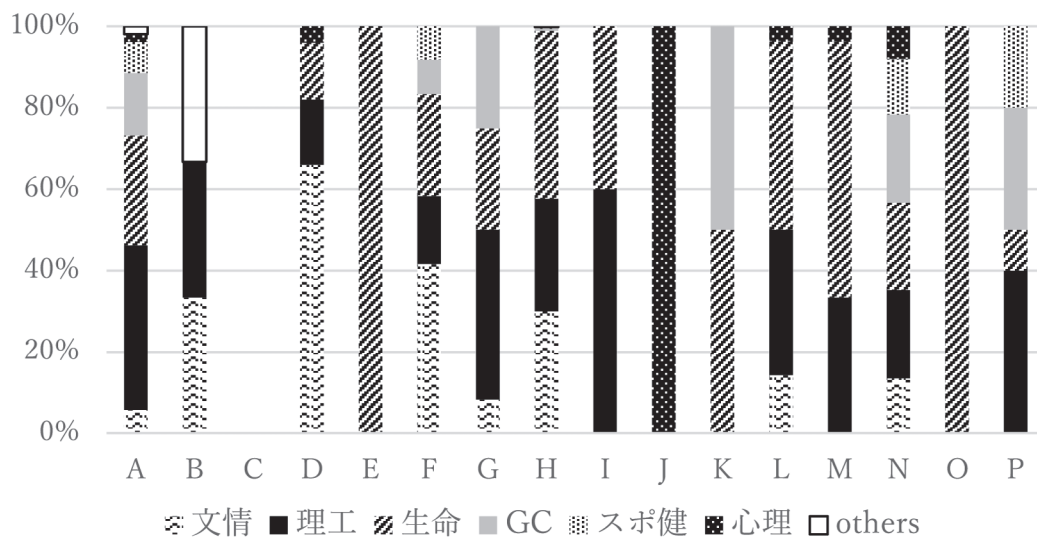


図3 分類コードの集計 (比率・'21年度)

## 2.2 校地間の比較

ここでは、今出川校地と京田辺校地の学習相談における非対称的な性質について述べていく。LCでは、全体としての集計はもちろんのこと、各校地における相談内容の内訳や人数等の基礎集計を行っている。新型コロナウイルスの蔓延以前である2019年度から2021年度にかけての各校地の相談総件数は981→307→637件（今出川、各年度4月1日から1月31日まで）、680→324→1278件（京田辺、同期間）と推移している。今出川校地のLCでは入口ゲートでのべ入室者数の把握をしている。その数は同じ3年間で605094→77571→193340名であり、2021年度は2019年度と比べて約3分の1になっている。その一方、今出川の相談総件数は約3分の2にとどまり、のべ入室者数と比べて落ち込みは少ない。

2021年度における今出川校地および京田辺校地における相談内容の内訳（割合）をそれぞれ図4、図5に示す。ここで、最も両校地の非対称性が見られたのは相談内容の分布であり、京田辺校地における相談内容の内訳は、全体の約81%が「H：特定の科目の学び方」となっており、これに対して今出川校地の「H：特定の科目の学び方」が占める割合は約2%と両校地でおおよそ80%の大きな差異が認められた。この理由としては次の二つのことが考えられる。一つ目は、京田辺校地における学生の大半が理系であり、基礎数学や電子回路等、学習相談内容として専門的な特定の科目に集中し

やすいことが考えられる。二つ目としては、今出川校地における学生の大半が文系の専攻であり、特定の授業科目ではなく、各科目で課されるレポートの基本的な構成や定義といった基盤部分を相談することが考えられる。実際に、図4より、今出川校地では「A：レポートの書き方」が最も多くの割合を占めており、全体の約37%となっている。これらの傾向は先行報告（木原・浜島2019; 矢内2020; 趙・矢内2021）とも類似しており、キャンパスごとの文系・理系専攻という非対称性が、学習相談においても反映されていることがわかる。

次に、図6および図7はそれぞれ今出川校地・京田辺校地の月別相談件数を示している。両校地において共通していることは、長期休暇となる8月から9月、2月から3月において月を通して30件以下にとどまっており、学生は授業の開講時期に相談する傾向が見て取れる。一方で、開講期間である4月から7月や10月から翌1月の分布については校地による非対称性が確認された。今出川校地における相談件数のピークは4月であり、文系科目は授業の各回でレポート等の課題が出され、新学期の始まりにそれらの書き方の作法をLCに相談しにくることが考察される。それに対し、京田辺校地は4月からゆるやかに相談件数が増え、7月がピークとなっている。理系科目は各回に出される課題よりも期末レポートや期末試験など、学期末に集中する課題に対しての相談が多いことが要因となっている可能性がある。なお、この傾向は実際の学習相談対応をしているLAの感覚とも一致する。また表3より、秋学期（10月～翌3月）に着目すると、今出川校地では12月が相談件数のピークとなっており、その周辺の期間である11月や1月には相談件数がおよそ30%少ないことが分かる。これに対し、京田辺校地は10月から1月にわたり相談数が100件より多いレベルでなだらかに推移しており、件数自体も多いことが分かる。

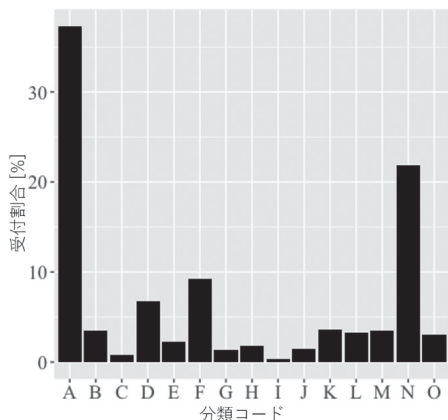


図4 学習相談の内訳（今出川校地）

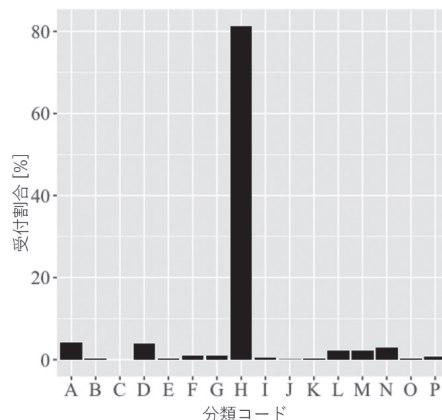


図5 学習相談の内訳（京田辺校地）



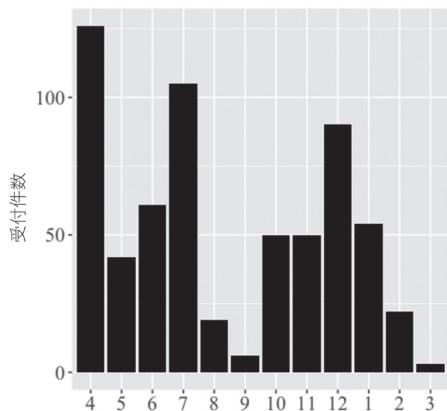


図6 月別相談件数（今出川校地）

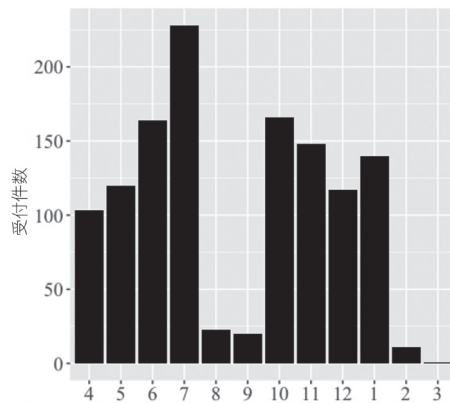


図7 月別相談件数（京田辺校地）

### 2.3 相談形式の面からの比較

最後に、昨今の新型コロナ禍において2020年度より導入したオンライン学習相談（澤、2021）が持つ相談形式の非対称性について、対面形式と比較して報告する。

2022年3月10日現在において、オンライン学習相談の相談件数は33件であり、前項で述べた各校地における対面形式での合計相談件数（1868件）と比較すると1.7%程度であり、利用頻度は決して高いとは言えない。オンライン学習相談の利点としては、自宅学習の際にも利用でき、文理問わずにLAや教員が対応可能な点である。実際に図8は2021年度に受け付けたオンライン学習相談の相談者の所属分布を示している。この図から見てわかるように、幅広い所属の学生が利用しており、文系キャンパスの今出川校地と理系キャンパスの京田辺校地の学生が混在している。一方で、これらの分布を比較すると、オンライン形式の分布はそれぞれの校地における対面形式の学部・研究科別の単なる和ではないこともわかる。特に、今出川校地の対面相談形式では、文学部・文学研究科および法学部・法学研究科が約半数を占めていたことに対し、オンライン相談形式では政策学部・総合政策科学研究科が今出川校地所属学生の相談件数（19件）の4割程度を占めていた。この偏りは相談件数の少なさによる不安定さともいえ、後述するリピーターが大きく寄与していたため、ここでは大きく取り上げないこととする。しかしながら、オンライン相談は同時に発話しにくく、対面形式よりも比較的に双方向性が担保されにくい特徴があり、学習相談における傾向には注目すべき差異が見込まれるため、今後も検討していく必要がある。

図9に示す通り、リピーターの分布は対面形式と同様に指数関数的な分布であり、相談を繰り返したい学生にとって障壁となるような非対称的な特徴は少ないと考えら

れる。実際、オンライン相談形式におけるリピート率は35.0 %であり、今出川校地のリピート率（32.8 %）と類似しているといえる。

次に学習相談内容の内訳を表1に従って分類すると図10に示す分布であった。なお、ここで、相談一件につき複数の属性を持つ場合があるため、合計件数は前述の件数とは一致しない。図10によると、文理それぞれのキャンパスにおける対面形式の分布の特徴が表れており、分類コードA、D、Fは今出川校地の学生に多く、Hは京田辺校地に多く見られた特徴である。これらの結果は木原・浜島（2019）および矢内（2020）の報告とも一致している。相談回数だけでなく相談内容の内訳において、両校地の対面形式と特性が類似していることから、オンライン相談形式が提供するLAや教員の対応に制限や偏りはないように思える。

最後に学年別相談件数に着目した。図11はオンライン相談形式における学年別相談件数を示している。なお、不明となっているのは相談対応時に学生IDを控えていなかったためである。ここで、大きな特徴として4年次生や大学院生の相談割合が対面形式よりも比較的高い傾向であることに注目されたい。対面形式では木原・浜島（2019）が報告しているように、高学年になるほどLC自体の利用者は減っていく傾向であった。筆者はこの傾向について、高学年になるほど友人や先輩といった交友関係の拡大と関連していると推測しているが、オンラインになると気軽に自身と異なる専門分野から知見を得られる、というメリットから利用が進んでいるのではないかと考えられる。特に、同志社大学では多様化する現代社会の課題解決に向けて、分野横断的に物事を見る視点や柔軟な創造力・提案力を涵養し、これからの世界を担う大学院生の学びを加速する方針（同志社大学高等研究教育院 2021）を打ち出しており、同志社大学高等研究教育院が提供するアドバンスドリベラルアーツ科目群の履修が進むなどしていることも影響しているように感じる。この他にも要因となる可能性はあるため、多角的な評価が必要であるが、本稿ではその詳細について議論しないこととする。



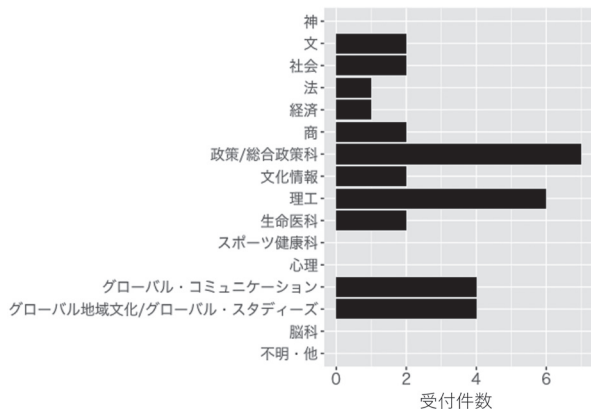


図8 オンライン学習相談 学部・研究科別受付件数

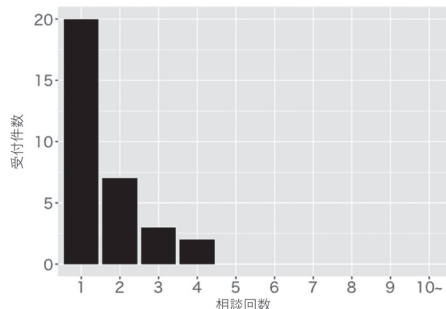


図9 オンライン学習相談 回数別受付件数

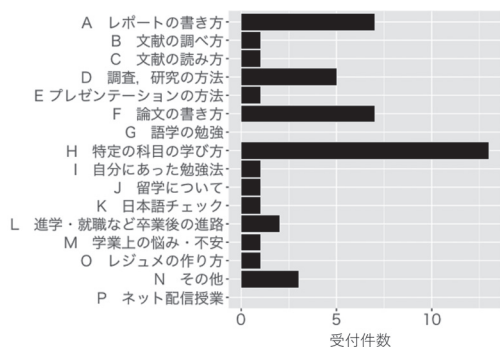


図10 学習相談の内訳（オンライン）

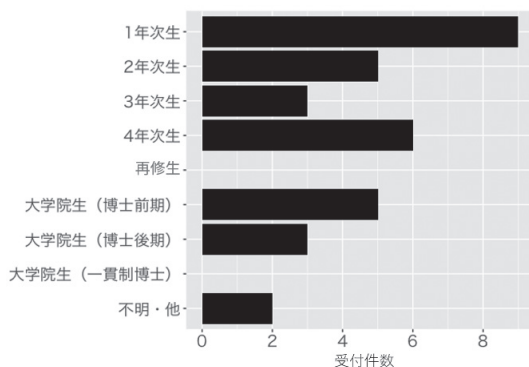


図11 オンライン学習相談 学年別受付件数

### 3 非対称的な傾向との向き合い方

前節で述べてきたように、同じ「学習相談」であっても、社会的な状況や形式といった異なる面から読み取ると偏りがあり、非対称的な特性を持つことがわかる。しかしながら、この非対称性を悲観的に捉え、対称にしようとする必要はない。これらの非対称性を事実に基づく特徴として受け入れることができれば、新しい学びの場としてさらなる発展を遂げられると確信している。

文・理それぞれを中心とする両校地の非対称的な相談内容、および施設の利用方法には検討すべき特性がある。前述の通り、2019年度と2021年度では今出川校地におけ

るのべ入室者数は約3分の1、同校地における学習相談総数は約3分の2となった。その一方で、グループ学習が可能な座席の予約数は2019年度に15265件、2021年度に8202件と約2分の1である。京田辺校地の同様の座席予約数が同年の比較で5173件から6107件と増加していることと比較すると、学生がLCで取り組む学習の内容との関連も推測され、より詳細にわたる検討には価値があろう。対面授業の科目数が0から2科目の学生が今出川校地で52.7%、53.4%、72.3%（順に1、2、3年次生。「2021年度キャンパスライフに関するアンケート調査」より）、京田辺校地で27.1%、32.8%、50.7%（同）と両校地に差があり、授業形態とLCの利用の関連の検討の余地もある。

前節で取り上げたオンライン学習相談形式は校地を越えた相談が可能なメリットがありながらも、利用が伸び悩んでいる状況でもある。これはオンラインツールにおいて、「話す」と「聞く」という動作が非対称的で一方通行になりやすいといった特徴が大きく関与していると考えている。コミュニケーションにおける音声の情報は非常に重要であり、吉野が研究対象としているコウモリやネズミ、ヒトといった哺乳類は、それぞれユニークな聴覚能力を持つことが知られている。コウモリの場合は、自身が発する超音波の反響音を聴取し、周囲の環境を把握するエコーロケーションの能力を持っている。この能力は周囲の環境に応じて柔軟に変化することが知られており、例えば、音声の周波数が周囲の個体と重ならないように調整する行動（Hase et al. 2018）などが興味深く、環境音が大きい場でも相手の声に傾聴できる能力として、ヒトが持つカクテルパーティ効果（Cherry 1953）と関連している。また、コウモリの超音波エコーロケーションシステムを応用することで、ヒトが「音で見る」能力（Sumiya et al. 2019）が検討されているほか、劣化雑音音声の復号知覚による新たな人工内耳システムの可能性（Tamai et al. 2017）など、音声知覚や音声コミュニケーション分野の発展はさらなる拡大を見せている。このように、聴覚に関する研究では、発声側と聴取側のそれぞれにユニークな特徴があり、進化の過程でこれらをひとつのシステムとして発展させてきた。一方で、オンライン形式の学習相談をひとつの聴取システムとして考えた場合、現状では、発声側と聴取側がうまくマッチしていないように思える。技術的な問題としては、通信相手との発話に時間的なずれがあることや、自身の声がイヤホンによってフィードバックされにくいという問題がある。生物が進化の過程で合理化してきたように、今後、新型コロナ禍という新たな環境に適応するための技術が発展することを期待したい。聴覚的な観点以外に目を向けると、オンライン相談において高学年の利用率が高い点は発展の兆しがあるといえよう。大学院生を含めた高学年の学生による学習相談は相談者自身の研究活動に関連し、高等教育機



関として有する研究活動を幅広い視点から議論できる場を提供できる可能性を秘めている。特に、グローバルに活躍する人材が求められる現代において、LCはそのような学生を育てる場として必要不可欠になっていくだろう。

## 付記

本稿で使用したデータは、同志社大学学習支援・教育開発センターの許可を得て使用した。データ収集、提供に関わったすべての教職員に謝意を表す。

## 文献

- Cherry, Colin E., 1953, "Some Experiments on the Recognition of Speech, with One and with Two Ears," *Journal of the Acoustical Society of America*, 25(5): 975-979.
- 趙智英・矢内真理子, 2021, 「コロナ禍における学習相談のあり方：オンラインと対面の並行による学習相談の有効性と課題」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(12): 18-29.
- 趙智英, 2022, 「コロナ禍2年目の良心館ラーニング・commonsにおける学習相談利用状況と利用促進のための取り組み」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(13): 9-22.
- 同志社大学学習支援・教育開発センター, 2014, 「2013年度学習支援・教育開発センター活動報告」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(5): 3-13.
- 同志社大学高等研究教育院, 2021, 「ALA科目群 紹介リーフレット」[https://next.doshisha.ac.jp/attach/page/NEXT-PAGE-JA-45/151338/file/ALA\\_leaflet.pdf](https://next.doshisha.ac.jp/attach/page/NEXT-PAGE-JA-45/151338/file/ALA_leaflet.pdf) (2022年5月11日取得).
- Hase, Kazuma et al., 2018, "Bats enhance their call identities to solve the cocktail party problem," *Communications Biology*, 1(1): 1-8.
- 木原宏子・浜島幸司, 2019, 「同志社大学ラーネッド記念図書館ラーニング・commonsにおける学習支援の実践と課題：理系学生の多いキャンパスでのラーニング・commons開設初期の取組」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(10): 30-40.
- 澤宏司, 2020, 「2年目のラーネッド記念図書館ラーニング・commonsの活動報告：理系学生による学習相談を中心に」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(11): 11-18.
- 澤宏司, 2021, 「同志社大学のラーニング・commonsのオンライン化」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(12): 8-17.

Sumiya, Miwa et al., 2019, “Bat-inspired signal design for target discrimination in human echolocation,” *The Journal of the Acoustical Society of America*, 145(4): 2221-2236.

Tamai, Yuta et al., 2017, “Infrared Neural Stimulation Evokes Auditory Brain Stem Responses following the Acoustic Feature of Speech Sounds,” *The haris science of review of doshisha university*, 4(57): 42-49.

矢内真理子, 2020, 「2019年度良心館ラーニング・commons活動報告書」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』(11): 5-10.